OCUAC

大阪市立大学山岳会会報　No.４８　２００９.６.２９

目次

		頁
冬富士（写真）	兵頭　渉	１
冬富士登山	兵頭　渉	２
仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳へ（現役・ＯＢ山行）	現役・松本　和也	３～４
ニュージーランド・トレッキング ピナクル山へ	鷲田　ゆり子	５～６
鹿島槍・再び　（現役・ＯＢ山行） 赤岩尾根より鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳登頂	現役・松本　和也	７～８
北アルプス・硫黄尾根	片岡　泰彦	９～１０
ネパールのトレッキングピークを目指す山旅 ～２００３年からの６年間を振り返る～	佐々木　惣四郎	１１～１４
総会が開催されました！ ・幹事長ご挨拶・活動報告/計画・総会案内の返信欄より		１５～１９
小林先生の思い出 ～「小林治俊先生遺稿集」を読んで	山本　新	２０～２１
続・駆り立てられるもの	和田　城志	２２～２５
皆様からのご寄稿をお待ちしています	会報担当	２６

冬富士登山

兵頭　渉

「新年の御来光を富士山頂で！企画」
１２月３０日から１月１日、二泊三日の予定で
伴、山田、山本新、兵頭の関東４人組、“富士山吉田口登山道”へ向かう。

１２月３０日

途中で買い出しをすませ１２時、「馬返し」駐車場着。

ここから樹林帯につけられた一間幅の登山道を進み、三合目付近から凍結路となるも五合目佐藤小屋までノーアイゼンで行く。佐藤小屋では年末年始の食材が自然の冷蔵庫に陳列され、その豪華さに一瞬小屋泊まり？！に傾きかけました。小屋周辺の道路はスケートリンクさながらの氷結路！滑らないようにそーっと通り抜け、１０分ほど登ったところの日蓮上人銅像前のスペースにテント設営、エンピを忘れてデコボコ雪面上、狭い苦しいながらも楽しいテントで泊。明日は空身で頂上往復、と計画変更し就寝。

１２月３１日

5時半テント発、登路の位置関係から日の出は見れなかったが七合目付近で日が差し始め、同時に富士山らしい息づく強風が歩みを停滞させ始める。

四十数年前の冬山訓練登山で富士山に登った時の記憶が蘇る；

耐風姿勢、風の息つく間に小走りで前進、耐風姿勢、を繰り返し、剣が峰に迫るも辿り着けず、帰途八合目に設営していたテントが風に飛ばされ、探索しつつ下山、六合目付近でクチャクチャな状態で回収したことなど。

雪面はアイゼンがよく効くクラスト具合、青氷を想定しヤスリ掛けした爪がサクサクと食い込む。頂上、浅間神社奥宮１１時５０分着、強風と疲労のためお鉢巡りはスキップし１２時下山開始、五合目テントサイトに１４時着、テントサイトの環境不良とアルコール不足などを理由にここでの晦日の宴会を断念し、１６時テント撤収下山開始、１８時馬返し、車にて帰宅。

今回は晴天に恵まれ、寒気と強風の冬富士を楽しみました。気象庁の記録では、１２月３１日１２時の富士山頂の気温はマイナス２０度でした。期待？？した青氷も無く、アイゼンが快適に効く雪面でした。

仙丈ヶ岳、甲斐駒ヶ岳へ（現役・ＯＢ山行）

松本　和也（現役・山岳部員）

Ⅰ期間：3/10~3/14
Ⅱ人数：３名（伴　明、佐々木　惣四郎、松本　和也）

現役部員の中で、まともに動けるのが私だけという状況下。残念ながら部だけでの登山計画を立てられる見通しすら立たないが、いつか来る時のため毎週の負荷訓練は怠らず、20kg を担いで低山参りの日々を続けていました。その節、佐々木先輩から再びお誘いのMail が届き、同行させて頂くことになりました。
当初は白峰三山縦走を希望していたのですが、冬山の経験が一度しかない私には難しいと説明され、北沢峠を拠点にして仙丈、甲斐駒へトライした次第です。

3/9(火)
昼に天気予報を確認された佐々木先輩から電話があり、明日出発となった。今回も食料を担ぐので、冷蔵庫から荷物を取り出し、パッキング。重さを量ったところ、7kg と随分と少ない。全重量は約 27Kg。

3/10(水)　戸台～（廃業）丹渓山荘
大阪梅田から阪急高速バスで伊那へ向かう。料金は往復で一人 9200 円。伊那着は 13:30。東京から来られた伴先輩と合流。前日予約していた伊那タクシーがバスターミルまで迎えに来てくれていた。橋本山荘までの料金９２00 円強。高い。
橋本山荘はひっそりとしていて、人の気配無し。入山準備を整えて、14:40 に出発した。17:50 に丹渓山荘に到着。尚、「丹渓山荘」は戸台にある「丹渓荘」とは別物で、北沢峠へ向かう八丁坂手前にある廃業小屋である。とはいっても、少々の隙間風があるだけで、普通に泊まれる（室内温度 7℃→夜―3℃）。近くには川もあるので、水は潤沢。
夕食の際、玉葱全てを忘れたことに気付く。この先まだ忘れ物がありそうで心配になる。

3/11(水)　（廃業）丹渓山荘～北沢峠
8:20 出発。北沢峠を目指す。昨日と比べて雪が深くなっているが、一日中アイゼンは不要だった。トレースが付いているので今後とも是非期待したい。八丁坂を登ったところにある大平小屋は無人。11:10 北沢峠（長衛荘）到着。ここも、小屋・トイレともに閉まっている。テントを張り、ここに数日滞在する。標高 2000m だが、やはり寒い。暖かかった去年の冬山とは違う。これが冬山か。朝の気温　マイナス７度。

3/12(木)　北沢峠～仙丈ヶ岳（往復）

寝袋の中は暖かいが、顔が寒い。天気は良好。6:50 出発。アイゼンが締まらず、10 分遅れてしまった。当初は甲斐駒を目標にしていたが、トレースが見当たらず、仙丈に変更する（こちらはトレースあり）。

森林限界付近から妙に風が強いと思ったら、抜けたところで地吹雪に遭遇。これまで経験したことの無い強さの風に雪が巻き上げられ、後頭部を雪玉がガンガン叩く。手袋を 2 枚重ねていても手が凍り、感覚がなくなる。風速３０ｍはある。ピッケルを雪面に突き刺しても飛ばされそうな風の中、10:00 になって小仙丈までたどり着き、綺麗な富士山を目にするものの、あまりの風に写真を撮るゆとり無し。これ以上は身の危険を感じ、流石に進めず、撤退。テント帰着は 12:00。その後風は止み、とても穏やかな天気になった。

3/13(金)　北沢峠～甲斐駒ヶ岳～（廃業）丹渓山荘

どんよりとした天気。今日は確実に雨が降る。天候が悪くなったら引き返すことを決めて 6:40 出発。先日トレースの下見をした結果、双児山に登った跡があるので、それを頼りに駒ヶ岳を目指す。2500m 付近で雪庇に出会い、慎重に抜ける。双児山登頂後はトレースが無く（どうやらここで引き返した模様）、ここからは交代で少しラッセルする。駒津峰登頂 10:50。昼食を食べながら進退を相談。頂上まであと 2 時間。私の技術では岩面のトラバースが難しい上、雨雲が辺りを取り囲んで雪が舞い出したので撤退する。

雪に降られながら下山。13：30 北沢峠着。テントを片付け、今日中に 3 日前泊まった丹渓山荘の小屋に泊まることにする。16:00 小屋着。

3/14(土)　（廃業）丹渓山荘～橋本山荘～下山

夜の間の雨が朝まで続き、止むのを待っていたが降り止まないので 8:30 頃出発する。

増水している川を一度左岸に渡り、右岸に渡る機会を窺いながらしばらく進む。

しかし、先へ先へ進むうちにその機会も無くなり、白岩堤防を目の前にして渡岸ルートを捜索する。結局ずっと雨に降られて橋本山荘に到着したが、携帯電話が通じず、丹渓荘まで歩こうとしていた矢先、誰もいないと思っていた橋本山荘から人が出て来、タクシーを呼んでくれた。伊那着 12:30 頃。

先に東京行きのバスに乗られる伴先輩とはここで別れ、バスまでの間佐々木先輩と温泉（菊の湯、昼ご飯とミニ温泉を営む。料金 380 円）、昼御飯で時間を潰した。実家帰宅 23:00。

＜山行の感想＞

去年と比べて体力は付いたのか、予想していたより疲れなかった。だが、技術的な面で課題が見えたと思う。今回は残念ながら目指していたピークに辿り着けなかったが、山は逃げないので、またチャレンジできる。その意味では冬山の寒さに地吹雪、雪庇と、様々な経験ができた今回の山行は、実りあるものだったと思う。

ニュージランド・トレッキング 「ピナクル山へ」

鷲田 ゆり子

上田ご夫妻からお誘いを受け、2009年2月～3月（現地は晩夏）にニュージーランド北島へ旅をする事となった。23日間もの長期間、家を空けた事がないし、海外のトレッキングは勿論初体験である。シュラフを持参しユースや山小屋に宿泊、その上毎日が自炊。アルファベットが一杯の計画書を見て戸惑った。これは地名なの？ 山の名前？ 一体わたしは何処に行くの？ 苦労して調べてみると、憧れのトレッキングは3回である事がわかった。

最初は、ニュープリマウスから約30km南のタラナキ山(別名 エグモント 標高2518m)。10分で歩ける遊歩道コースから、数日間かけて山周辺を歩くコースなど、合計300km以上のウォーキングトラックがあるらしい。わたし達は「Pouakai Circuit Trekking」へ。ホーリ Hut（標高950m）に一泊し同じ道を戻る予定。ネットで見たタラナキは富士山のように美しい。

次は、北島中央部に位置する山岳国立公園トンガリロの「Tongariro Northern Circuit」。これはNZ Great Walkのひとつである。「Tongariro Crossing」から東側のトラックも加えて、ナウルホエ（標高2291m）を巡る44kmのコースを山小屋に3泊して歩く予定。クレーターやエメラルドの様に輝く火口湖の風景が堪能でき、それは美しいとの事。

最後は、コロマンデル半島の付け根に位置するKauaeranga Valley。ここはこの地方随一のトレッキングエリアであるが、マイナートラックとの事。わたし達は「ピナクル（標高759m)」に登り、ピナクル Hutに一泊して下山する予定。

事前に、上田さんからは「今日は良いお天気ですね」「ひとつ召し上がりませんか」ぐらいは英語で話せないとねって言われた。全く英語の話せないわたしは早速、英会話教室に通う事になり電子辞書も購入した。

また、トレッキング中の荷物は8kg以下にせよとの事。亡き夫のザックに詰めてみる。彼の最後の山行となった羅臼で使ったザックだ。胸がキュンとなる。気持ちを取り戻してパッキング。水を持ったら3kgのオーバーとなった。困っていたところ上田さんから軽いシュラフ（600g）をプレゼントして頂いた。これで一気に減量出来たが、まだまだ重い。「服装・携帯品チェック表」を作成し重量も記入。山小屋で履くスリッパ・メガネケースまで1gでも軽い物を選んだ。頼りにしている電子辞書280g・スケッチの絵の具セット200g等は不携帯とした。8kgで収まる見通しが立ったが荷物を担いで歩けるだろうか。

いよいよピナクル山へ

3月9日（晴れ） 最終のトレッキングのため、3人はテイムズのユースをレンタカーで出発。北東へ24km、トラック入り口の道路終点駐車場まで約1時間。ここに車を置きピナクルHutに向かう。重量制限が一人の長いつり橋を渡り、Kauaerangaの本流沿いの道から支流に入り、さらに幾つかの沢を横切る。カウリの木の運搬用に作られたオールド・パックホース・トラックをゆっくりと登る。大きな石が敷き詰められた道や岩盤を削った急な階段状

の道が続く。140 分でハイドロキャンプ跡へ。この地は幾つかのルートとの交差ポイントとなっている。尾根に出るとピナクルの勇姿が見え始め、尾根沿いに暫く行くと緑の森の中にピナクル Hut（標高 560m）が。ほどなく到着。駐車場からの所要時間は 3 時間半。

今夜は Hut に地元の高校生 70 名が宿泊するという事を DOC のビジターセンターで聞いていたのだが、まだ到着していない。管理人（バーデンと言うらしい）も不在で我々が一番乗りの様だ。テラスで圧巻のピナクルの全容を眺めながら食糧大臣（上田さんの奥さん）考案の日本食のお昼を楽しむ。

ひと休みしてピナクル山頂へ出発。前半は肩まで良く整備された階段状の道を、後半は強風の中、岩場を人工的なスタンスやホールド、2 箇所に取り付けられた垂直に近い梯子等を頼りに登る。頂上は切り立った狭い岩場であるが、安全のための柵がある。この間も誰にも会わず、コロマンデル半島の原生林に覆われた山々や、遠くに霞む南太平洋等の 360 度の大パノラマを 3 人で独占して堪能した。山頂往復 2 時間。

Hut に戻ってベッドを確保した頃、高校生と先生 80 名が到着した。ここは 90 人が収容でき NZ 一番の最新の設備を持つ Hut。シャワー（使用出来そうにない）・炊事用のコンロ・トイレ等が完備されていて 1 泊 15 ドル（約 900 円）。日帰りの場合は、Hut の入り口にあるボックスに善意の寄付金を入れる。

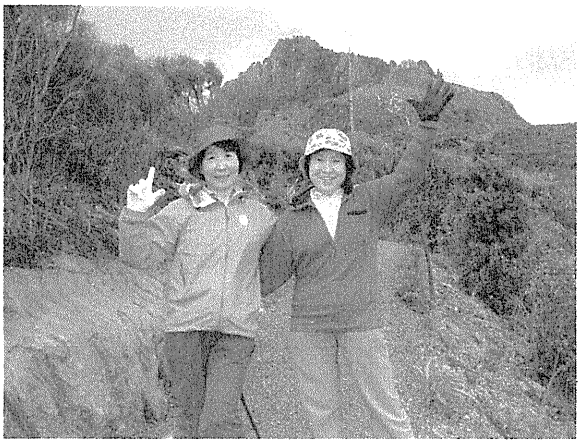
テラスでスケッチをしていたら大勢の高校生の男女に取り囲まれた。名前を聞かれ「ゆりこ」と答えると「ゆりこ・僕を描いて」と頼まれたようなので似顔絵を描いた。そして後日送ることを約束した。上田さんや奥さんも、それぞれ大勢の高校生に囲まれており、カミュダ・カミュダと呼ぶ声が聞こえてきた。彼らはここに 2 泊して少し危険な箇所もあるピナクルにも登る様だ。こんな野外活動は 1 年に何回ぐらいあるの？ と英語で訪ねたかったが、にわか勉強のため聞けなかった。グループごとに考えたらしいメニューで夕食作り、それは賑やかであったが慣れている様子。こんな体験は豊富なんだろう。このような経験を積み重ね、自然を守っていく精神を培っていくのだろうと思った。また、バーデンも小さなパック状の蜂蜜を分けてくれたりして外国人のわたし達を気遣ってくれた。

3 月 10 日（晴れ）　高校生に見送られて下山。カミュダコールが響いていた。ハイドロキャンプまで 1 時間。ここから左手にルートを取り、ビリーゴート トラックを通りゆっくり下山。途中チェコとスロバキアからの 2 組に出会う。上田さんが Hut で 80 名の高校生らがお待ちかねだと伝えた。林道に出て駐車場へ。Hut からの所要時間は 5 時間。

保護されている大自然、その大自然の中での超シンプルな生活体験、純朴な高校生や沢山の人達との出会い。身も心も満たされた NZ の旅であった。今、素晴らしい地球に生きている喜びで一杯である。

上田ご夫妻にお礼を申し上げたい。

2009.5.26　記



ピナクルをバックに上田さん(右)と 2009.3.9　撮影

鹿島槍・再び（現役・ＯＢ山行）

～赤岩尾根より鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳登頂～

松本　和也（現役・山岳部員）

Ⅰ期間　5/2～5/5

Ⅱ人数 三名(山田 裕敏、　兵頭 渉、　松本 和也)

恒例となっている GW 山行。今年度は OB の山田先輩、兵頭先輩と、北アルプスは鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳に足を運びました。

5/2(土)

自宅から塩尻駅までおよそ 8 時間、電車に揺られる。高速道路料金値下げの影響か、例年より乗客が少ない。塩尻からは兵頭先輩の車に乗せてもらい、久しぶりに「ヒュッテ雪線」に泊まる。

5/3（日）(曇り)

山行の食料をこしらえて 07:05「ヒュッテ雪線」発。車で大台原の駐車場に辿り着いたのが 09:00。ここに来たのは去年の鹿島槍東尾根以来である。09:25 大谷原発、60 分ほどコンクリート道を歩き、赤岩尾根の取り付きに到着する。ついでに去年失敗した東尾根行きの赤旗も見つけた。

10:35 取り付き発、赤岩尾根は予想より傾斜が厳しいうえに、時折雪が固まっていない場所があり、数度足が雪中に埋まることがあった。食料を担いでいたので思うように速度は上がらなかったが、焦っても仕方ないのでゆっくり登る。途中、平にて休息した際、北側に東尾根が見える。ここから見る岩峰は、やはり大きい。

この日の目的地である冷池山荘(2410m)には 16:30 着。GW ということもあり、多くのテントがある。気温は 3℃前後。料金は相場通りの一人 500 円。

5/4(月)

最低限の荷だけ背負い、06:00 に出発。本日は鹿島槍と爺ヶ岳を往復する予定である。最初はアイゼンを付けていたが、途中から岩が露出しているので、アイゼンを外す。3～5 程のパーティも鹿島槍を目指していたが、やはり若い人は少ない。

二時間ほどかけて 08:00 鹿島槍の南峰に着いたが、北峰が意外に遠かったので諦め、いずれ東尾根から登ることにする。08:15 鹿島槍・南峰発。帰り道に突如雷鳥に出くわした。雪でカモフラージュしていたので、近くに来るまでまったく気付かなかった。雷鳥も人間はそれほど警戒していないようで、少し離れたところから雪中の餌を探している。

一度冷池のテントに戻り、昼食とする（09:40 着）。山田先輩は爺ヶ岳を休み、食後は兵頭先輩と私で爺ヶ岳に向かう。11:00 冷池発、爺ヶ岳までは特に危険なルートはなかったが、雪の斜面を降りるのがどうも苦手で、なんどか転ぶ。
爺ヶ岳の最南端、南峰に付いたのが 12:15。取って返して中峰等にも立ち寄りつつ、冷池に戻った（13:40 着）。
が、戻って 10 分と経たないうちに、山荘の方からヘリポート作成のためテントを一寸撤退してほしいとの申し出があり、もう一度張り直すのに嫌気が差して今日中に降りることになった。随分な仕打ちである。
14:25 にテント場を去り、帰りは北に赤岩尾根を見ながら沢下り。沢の雪は雪すべりができるほどの固さ。最初は雪の斜面を降りる練習も兼ねて普通に下っていたが、一日でかなりの高度差を経験したせいだろうか、だんだん足が疲れてきて後悔する。大台原まで戻ってきたのが 16:25。その後は去年と同じく、薬師の湯に浸かり、ヒュッテ雪線に泊まった。
翌日、行きと同じく兵頭先輩に塩尻まで送って頂いて、電車で帰阪。帰路も空いていた。

北アルプス・硫黄尾根

片岡　泰彦

今年のGWに硫黄尾根に行ってきました。北鎌尾根は5月山(82.5)と冬山(89.12~90.1)と2回トレースしたことがありますが、当時僕は、次は硫黄尾根を登ろうという強い意欲が湧きませんでした。脆く赤茶けた岩肌と積み木細工のようなゴジラの背岩峰が連立し、最初のジャンダルム群にある硫黄岳は標高2553mもあり大きすぎるので、西鎌尾根の合流地点まで標高が硫黄岳より高くなることがありません。つまりピラミッダルに序々に高みへと導かれる尾根でなく、鋸の歯を上下しながらの難しい行動が必要であり、且つ雪面が赤茶けて汚れていることで風化の激しそうな尾根で怖い印象をもっていたからです。
案の定、今GWも北鎌に行くパーティは多いが、硫黄尾根に入ったのは、我々の他1パーティだけのようでした。今回は、ＪＡＣ関西支部長の重広さんを筆頭に、明治大山岳部監督の山本氏、現在も文科省登山研修所の講師をしている加藤氏と高齢隊でありますが経験豊かな4人で慎重に行動しました。

（夜行列車雑感）

信濃大町に集合としましたが、東京からは夜行列車で早朝5：00に到着、大阪からは列車の便が無く、糸魚川～南小谷～信濃大町8：30着と不便なようです。尤も僕も入山下山が同じ場所であれば、その多くは車の利用です。久しぶりに「ムーンライト信州」という全席指定の夜行快速列車に乗りましたが、揺れる振動を体で感じながらちょっぴり酒が飲める贅沢はなんともいえません。驚きはその指定券が1枚210円と安く、急行列車でないことで急行料金が設定されてません。通路で横になる人は皆無で、懐かしい車内の喧騒もなく上品な雰囲気で目的地まで運んでくれます。思わずワインを飲みたくなりました。

（登山雑感）

ジャンダルムというか針峰が無数にあり、硫黄岳、赤岳南峰（2459m）、赤岳（2416m）を除いて、１９Ｐあります。登りはそんなに難しくありませんが、下降が難しく、懸垂下降を含め下降時にザイルを出した回数は１０回にも及びます。全体の風化が激しいので、ザイル回収に伴う落石は必ずあり、細心の注意が必要とされる一瞬です。ヘルメットは必携で、我々も入山から西鎌稜線までゼルプストは装着したままで行動しました。懸垂支点には残置シュリンゲが多く残されているのですが、腐ったものが多く、残置ハーケンも所々に打ってありますが、叩くとボコボコと音がするので、信用度は低いものと思います。我々は入山4日目に槍ヶ岳の頂上に立つ事が出来ましたが、雪の状態により難易度が変り、当然ながらルートの選択・判断が大切です。どんな季節であれ、時間と余裕を持って行動したい尾根と思いました。

（その他雑感）

OCUACのＭＬに写真を載せたところ、奥田さん（Ｓ44年卒）は５月と春山（３月）、山田さん（Ｓ42年卒）は５月に行かれている連絡がありました。30年以上も前ですので、多少は岩が堅かったと思いますが当時の技術レベルの高さが覗えます。エイト環（下降器）を使わず、肩がらみの懸垂下降で突破されたと思います。アイゼンも10本爪で、装備・食料の重さも今と比較できません。加藤文太郎、松濤明の北鎌尾根が余りにも有名なので歴史の影に隠れてますが、硫黄尾根は、黒々とした北鎌尾根を見ながらの好ルートであることは間違いありません。ガスの間に間に槍ヶ岳が光って見える印象に残る登山でした。

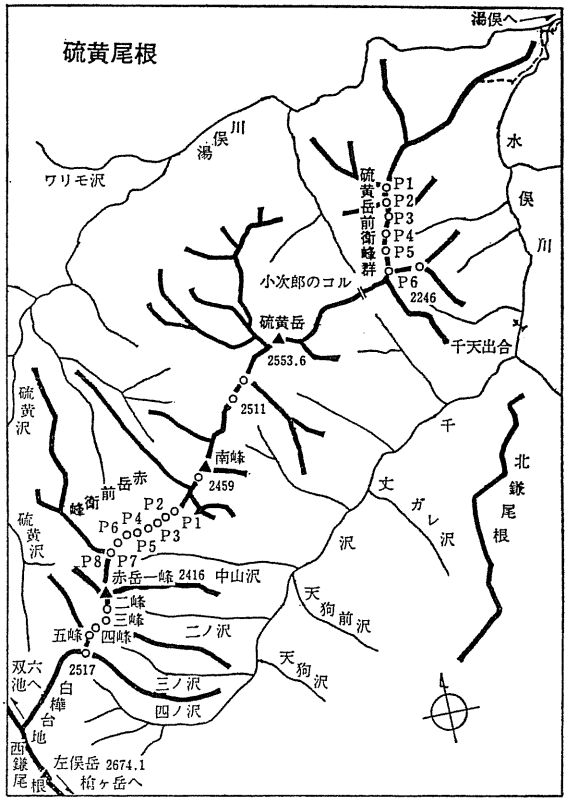
コースタイム

5/2 高瀬ダム(9:40)－湯俣(12:35)－水俣川吊橋(12:50～13:10)-稜線(14:15～14:23)－TS1:2031m(16:40)

5/3 TS1:(5:30)-P3(6:25～6:40)-P6(8:20～8:50)-硫黄岳(11:40～12:30)-TS2:赤岳南峰(15:37)

5/4 TS2:(5:30)-P3(7:30～7:50)-P4(8:10)-赤岳(11:10)-中山沢のコル(11:30～11:45)-白樺平(14:15)-TS3:西鎌尾根直下(15:35)

5/5 TS3:(5:00)-千丈乗越(7:20～7:30)-槍ヶ岳肩(9:05)-槍ヶ岳(9:20～9:30)-槍ヶ岳山荘(9:57～10:05)-飛騨沢分岐(10:15)-宝の木(10:50)-槍平小屋(11:40～12:15)-滝谷避難小屋(12:50～13:00)-白出沢小屋(14:05～14:25)-新穂高温泉(15:50)



概念図：「日本登山大系
槍ヶ岳・穂高岳」
（２４３頁）

ネパールのトレッキングピークを目指す山旅

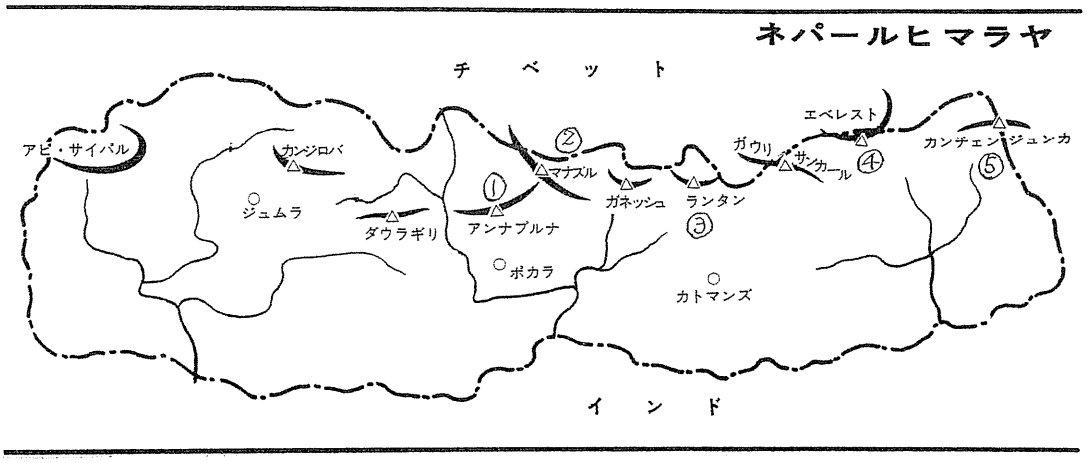
― 2003年からの６年間を振り返る―

佐々木　惣四郎

２０００年末に退職し、２００３年秋から２００８年までの６年間を毎年ネパールのトレッキングピークを目指して参りました。山屋としては７０００－８０００mに流れてゆくのが普通ですが、パートナーに恵まれなかった事、手軽に楽しめた事　等々により有り余る暇を利用してのアルピニズムとは離れた、高所ハイキングに終わっています。

最大の動機は、６０００m前後から眺める風景が素晴らしくて、ネパールの代表的なルートから様々なヒマラヤを味わいたいと思った事で、特に高度があがるにつれて展開するパノラマでは、山登りの実感がたとえ様も無く強調され、懐かしく感じられました。

＜踏破地域＞



① アンナプルナ地域

２００４年秋：チュルファイースト（６０５９m）

２００６年春：テントピーク（５６６３m）

２００８年春：ピサン（６０９１m）、チュルウエスト（６４１９m）

② マナスル地域

２００８年秋：マナスル周遊とラルキャピーク

③ ランタン地域

２００７年秋：ヤラピーク（５５００m）

④ クーンブ地域

２００３年秋：アイランドピーク（６１８９m）

２００６年秋：メラピーク（６４７３m）

２００７年秋：アイランドピーク（６１８９m）

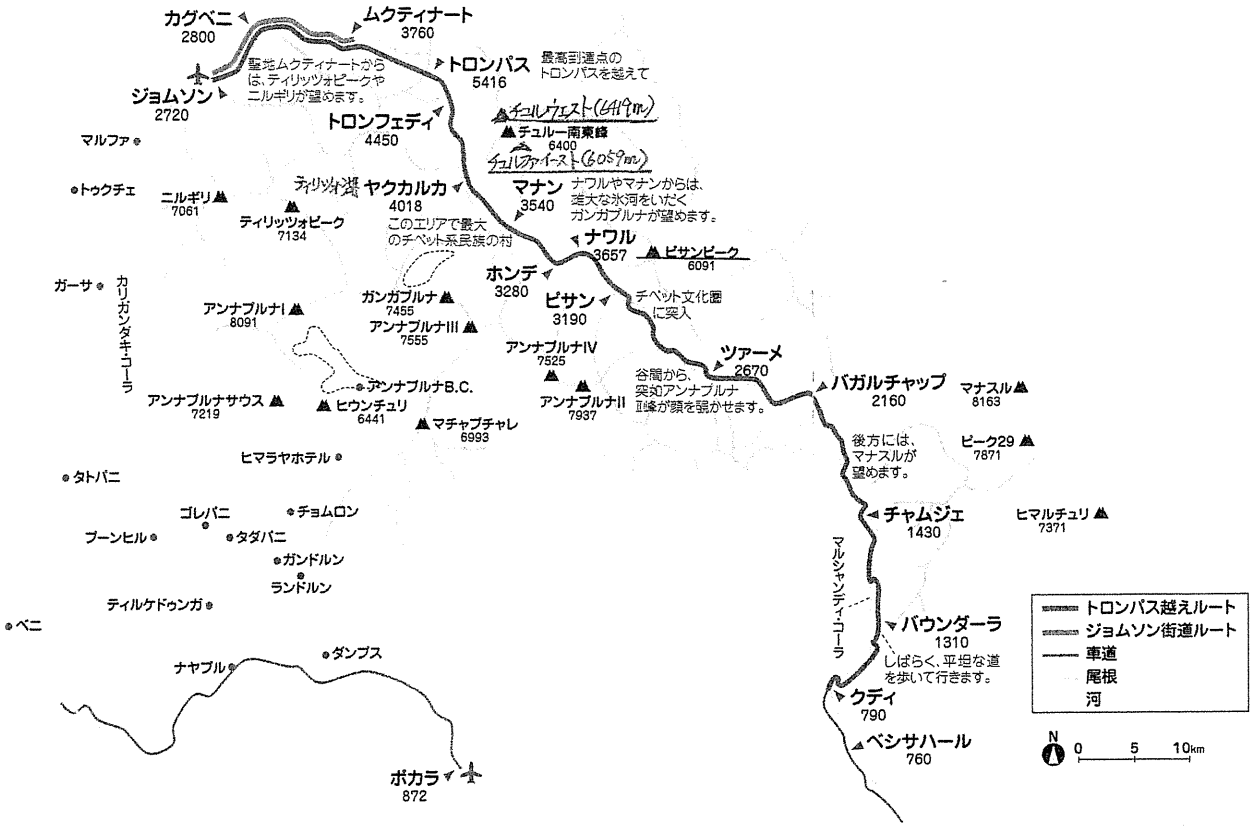
＊２００９年春：ゴーキョ～カラパタール

⑤ カンチェンジュンガ地域

２００６年秋：ドーモ・リ（６０５０m）

［備考］掲載地図について：①～④は「風の山人　ネパールトレッキング」（風の旅行社）に拠る。
⑤は「ヒマラヤの高峰１」（深田久弥著。白水社・新版）に拠る。

[アンナプルナ周回]



① <アンナプルナトレックの見どころ>

1．トレックルートよりの山の迫力には欠ける。しかし、マナンからムクチナートにかけては、山が連続して表れ飽きない。
特に、ガンガプルナは素晴らしい。

2．ピサン、チュル連峰の BC からの景色は迫力あり、写真が飽きない。

3．ヤクカルカより、チリチョ湖を横断してジョムソンに至るルートは、胸ときめく。

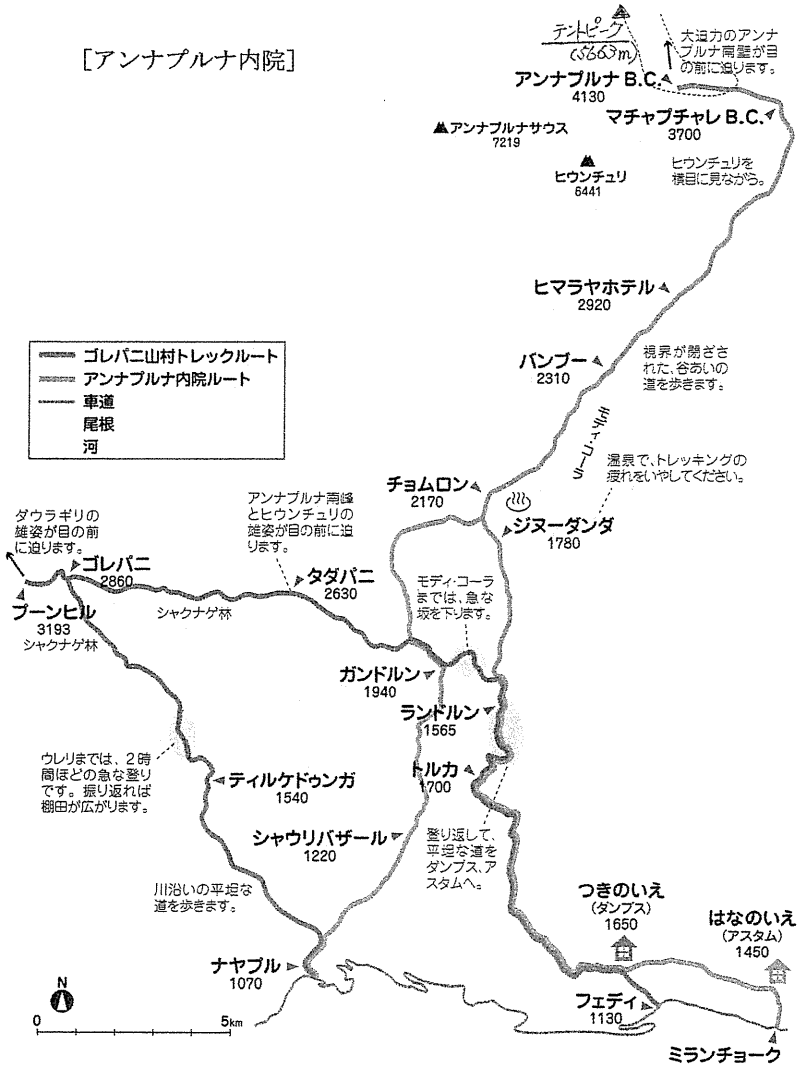
4．内院のアンナプルナ BC よりのマチャプチャレは、圧巻である。

5．テントピーク頂上よりは、３６０度のパノラマの展開。

6．アンナプルナＩ峰は、BC からみると迫力に欠けるが、頂上からはやはり貫禄があり、ヒウンチュリ、南峰も美しい。

7．ジョムソンからポカラまでは、車が２００９年度には開通したようだ。

[アンナプルナ内院]



②<マナスルトレックの見どころ>

1．シャウリよりニヤックに至るブリガンダキに落ち込む１０００－２０００ｍの岩壁は圧巻である。

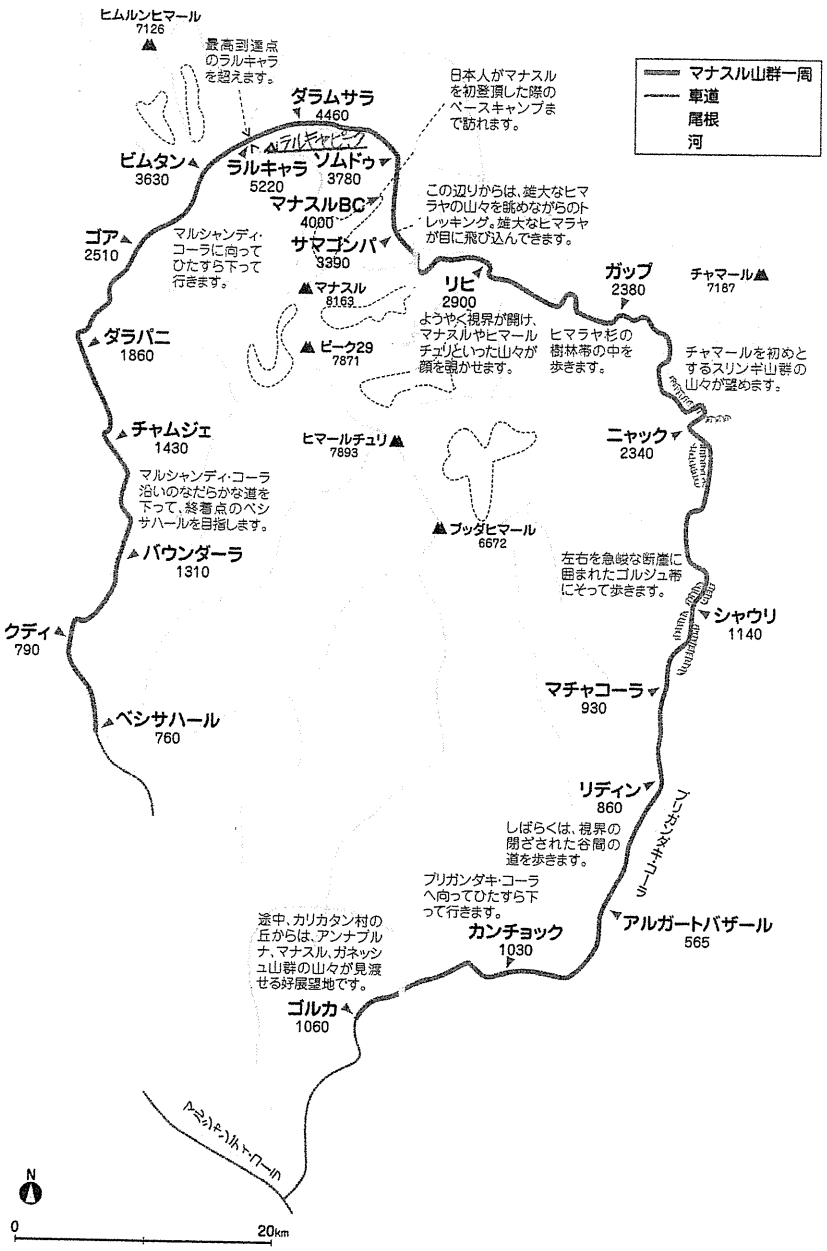
2．ホンサンドゴンパよりプンゲリ氷河へ２時間登るべきで、迫力あるP29、マナスルが望める。

3．マナスル BC へは、是非訪れてみたい。マナスル氷河と氷河湖が美しい。

4．トレックルートのローからビムタンの景色は、変化があって素晴らしく飽きない。ラルキャパスにはかなりの雪がある。

5．何といっても主役はマナスルであり様々な形の姿が望めるが、サマ部落近くの斜面から映したマナスルの姿が最も猛々しい双耳峰である。

6．ビムタンの風景は、迫力あり。



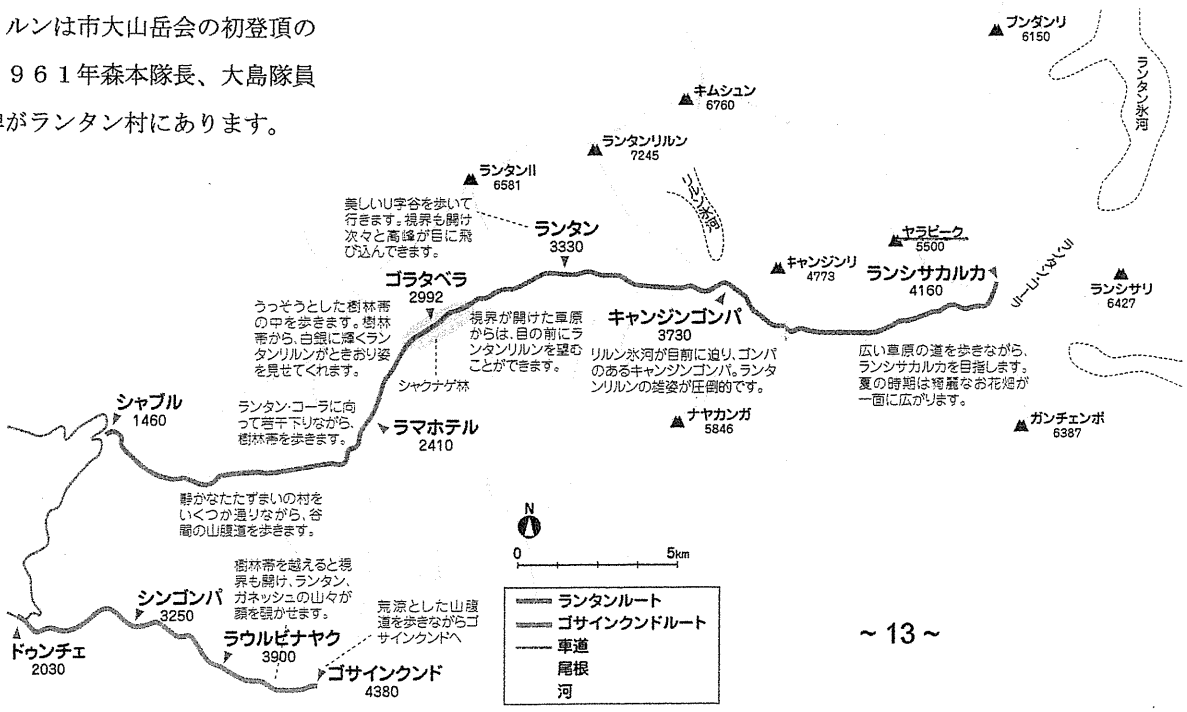
③<ランタン谷の見どころ>

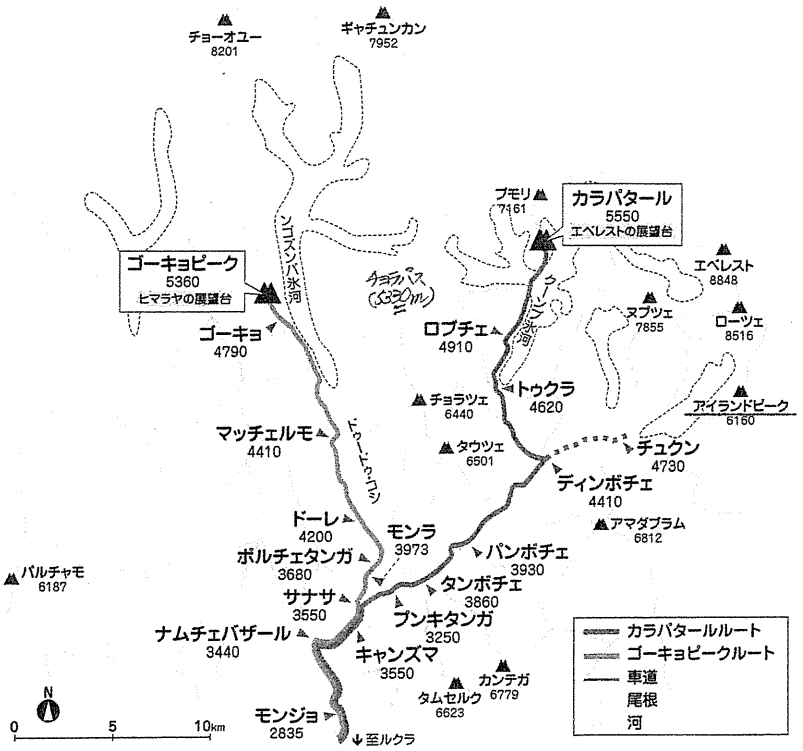
1．カトマンズから簡単に３日で入れる。

2．キャンジュンゴンパは完全なバッテイ村でリラックスできて、周りの景色は最高に穏やか。

3．ランシサカルカまでトレックすれば谷の山の豊富さが実感できる。

4．ランタンリルンは市大山岳会の初登頂の山にて、１９６１年森本隊長、大島隊員２名の墓碑がランタン村にあります。





④<クーンブヒマールの見どころ>

1．山岳美という点では、ゴーキョは、カラパタールよりも優れている。チョーオユー、ギャチュンカン、ゴズンバ氷河の調和が全く素晴らしい。

2．カラパタールは、エベレストの迫力が全てとはいえ、プモリ、ヌプツエーが素晴らしい。

3．チョラパスは、６－７時間歩行が必要なるも素晴らしい景色で氷河上を約３０分少し歩く。

4．ゴーキョへは、カトマンズから１４日間で小屋泊まりで１０万程。

⑤<カンチェンジュンガの見どころ>

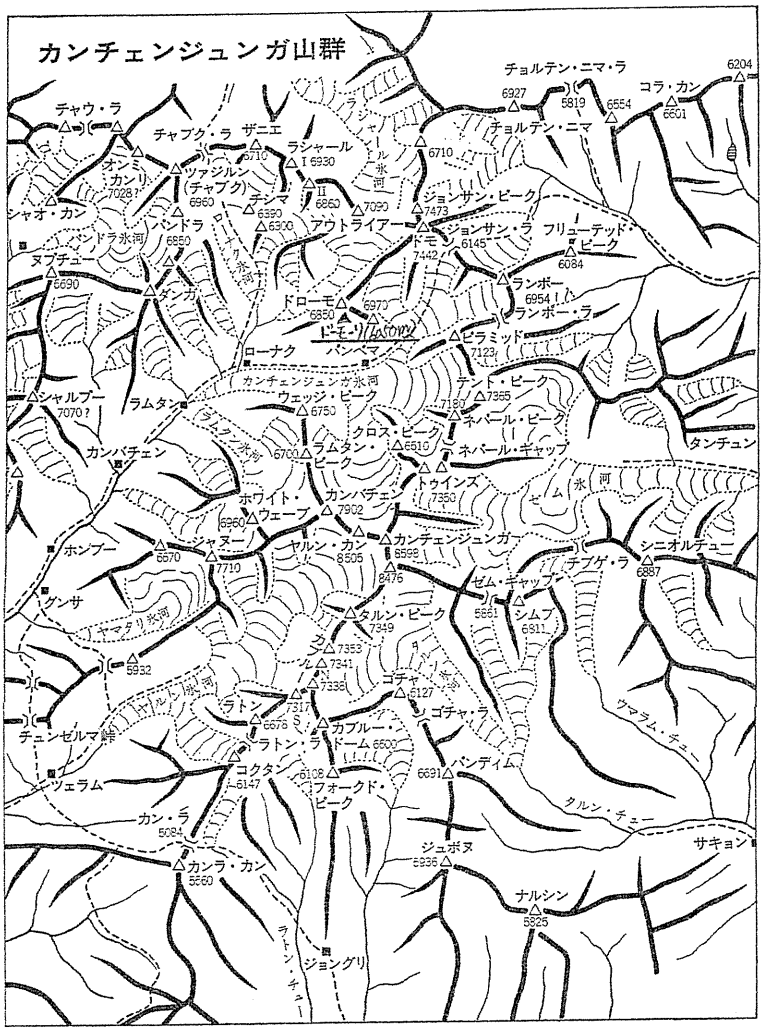
1．ロナック（ローナク）よりのジャヌーは見とれる美しさで、何回も写真を撮る羽目になる。

2．パンペマのカンチェ BC からは、北壁が正面に見え、変化のある姿は、８０００m峰にふさわしい豪快さがある。

3．BC の裏山に登れば、カンチェ周辺の山々が余りにも多く眺められ、圧倒されると同時に頂上を離れがたい。

4．このトレックの難点は、出発地点であるタプレジュンへのアプローチが飛行機、バスにて３日間ぐらいかかる事である。

5．この周辺の山は、７０００m以上が１０－１２もあり、変化に富んでいる。



総会が開催されました！

２００９年4月１８日
於：大阪弥生会館

今年も３８名の出席の下、総会が開催されました。川勝会長の挨拶に始まり、佐々木幹事長の総括報告があり、島川幹事の昨年度活動報告および今年度活動予定や上田幹事の会計報告等がなされました。また役員改選も行われ、初代幹事長や副会長ののち顧問を務めていただいた藤本氏が退任されました（会計報告、本年度役員については別紙参照下さい)。

今年の記念講演は、当会の佐々木惣四郎氏に「ネパールトレッキングピークの１コマ」と題して話していただきました。東西に大きく広がるネパールトレッキング可能エリアを精力的に踏破した足跡を豊富な写真により紹介され、ヒマラヤの高峰を間近に眺めつつトレッキングピークを登る山旅の楽しさを味わうことができました。

幹事長ご挨拶

佐藤君のリリーフとなって。。。

佐々木惣四郎

昨年１２月に佐藤君が余りにも早く旅たちました。人脈の多かった彼を失った事は山岳会にとっても痛恨の極みであります。彼のあと再度、幹事長を賜りましたので、引き続きご協力をよろしくお願い申し上げます。

昨年の秋は、本来なら久方ぶりに、山岳会の名のもとに８０００ｍの山にチャレンジする事になっていましたが、残念ながら諸般の事情にて立ち消えとなりました。今後も小さな可能性ながら夢を求めてゆきたいと思います。なお、岡山にいる武部君が２０１０年に高く険しい峰を目指しており、今年４月から岡山パーテイの高度順化の為に６０００ｍ峰２峰に向けて出立されました。

また和田城志さんが、華々しい登山履歴を回想のストーリーにて「岳人」に今年１月号から年内にかけて執筆されており、我々に身近な話題が多々あり、目を通して頂ければ、お楽しみ頂けるのでは　と思います。

山岳会も高齢化に向かっており、若い会員とのコミュニケーション不足もあり、どう運営を計ってゆくかの問題にぶつかっています。基本的には、山とはどんな世界か！登山とはどんな世界か！等々について、それなりに理解しあえる仲間の集まりとして、今後の動きを見定めてゆきたいと思います。

絆の道具立てとしての「ヒュッテ雪線」も１２年目となり大きな存在になっています。今一度の「ヒュッテ雪線」活用を検討頂きたいと思います。同時に、山岳会会報は、全会員への便りとして今後とも、力をいれてゆきたいと思います。寄稿へのご協力よろしくお願い申し上げます。

小笹氏のスキースクールも年4回実施されており、登山とは若干異なる雰囲気をかもしだしています。ただ残念ながら登山に行く会員、行くことの出来る会員が少なくなっており、変わって幅広い旅の分野に広がりつつあるようです。

現役の山岳部に関しては、久方ぶりに5人の新人を得た6年前から現在までで、再び2人になっており、新人の歓迎が急務の事態になっています。実質1名の部員では思い切った活動もままならず、OB参加で昨年度は3回だけの登山となりました。新人を得た後には若い会員にも一肌脱いでもらいたいと切に願っています。

現在の各大学山岳部は、限りなく少数化への道をたどっており、各大学の連携の下、山岳活動を展開してゆく動きがでてきていますが、難しい局面を迎えています。今後僅かな部員であってもなんとかモチベート(動機付け)を計り、自主性のある登山をベースにしてゆかざるを得ないのではと感じています。

いずれにしろ「仲良しクラブ」に終わってしまわない様に、山を忘れず、わずかながらも生きる楽しみに組み入れて頂ければ幸いと思っています。皆さま益々のご健康とご活躍を期待して挨拶とさせて頂きます。

以上

[2009年度活動予定]

実施月	行き先等	参加者
4月末/5月初	新人歓迎登山　南アもしくは中央ア	OB、現役合同
５月中旬	富士山スキー滑降	兵頭・片岡・吉村他
７月	駒ヶ根山荘整備	中島他
18/19/20日	兼　囲碁大会、沢登り	（昭和一桁代傘寿、喜寿祝い）
8月	唐松～白馬～日本海	山田他
10月	ネパール・トレッキング	佐々木、山田他
	（ランタン谷奥地）	
１１月	駒ヶ根ゴルフ会	恒例メンバー
	（兼山荘清掃）	
12月	年末　富士山詣で	伴、兵頭他

小笹スキー・スクール

12・3月	夕張	恒例メンバー
1・２・３月	栂池	同上

[2008年度活動報告]

実施月	行　き　先　等	参　加　者
４月	ネパール・トレッキング	佐々木・山田
	（ピサン、チュール・ウエスト、ティリツオ湖）	
５月	鹿島槍東尾根試登	兵頭・松本・吉村
７月	桂木場/木曾駒/空木　縦走	兵頭・松本・吉村
		佐々木・山田
同	駒ヶ根山荘整備	中島、大堀、藤木
		丸子、伴、山辻、山田
同	大田切川中御所谷西横川遡行	伴、山田
９月	前穂～槍～笠　縦走	佐々木、松本
10月	駒ヶ根ゴルフ会	中島、久保田、小笹、吉田、上田
	（兼山荘清掃）	丸子、藤木、広瀬、大堀、山田
同	ネパール・トレッキング	小林、佐々木
	（マナスル周遊）	
12月	大晦日　富士山詣で	伴、山田、兵頭、山本新

個人の海外山行

７月	オーストリア　チロル　ハイキング	上田夫妻
８月	カムチャッカ・アバチャ山	島川
１/２月	ニュージーランド・トレッキング	藤本夫妻

小笹スキー・スクール

12・3月	夕張	小笹・大堀・丸子・藤木・山田
		苑樹・井本
1・２・	栂池	同上＋上堂、兵頭、吉村、沢井、島川他

平成２１年度総会案内の通信欄より

○<狂歌一首>近頃の医者の診断（みたて）はワン・パターン、原因問えば全て「加齢！」（カレーライスは好物ですが・・・・）

時折近隣の山々（主に六甲、比良他）の登山を楽しんでおります。但し、片道はケーブル・ロープウェー利用となりますが。（昭和３４年卒、中西雅一）

○丁度、四万十川源流行と重なり欠席します。（昭和３３年卒、堺晧二）

○この冬は栂池高原スキーのお仲間に加えて頂き楽しく過ごしました。

（賛助会員　柴原勝）

○未曾有の経済危機の中、なかなか山に行く時間も取れません。毎回、欠席して申し訳ありません。皆様によろしくお伝えください。岳人１～３月号、和田さんの記事拝読しました。４月号が楽しみです。（昭和３９年卒　岡野幸義）

○大阪は遠くてなかなか行くことが出来ず申し訳なく思っております。なるべく東京の集会には出席できればと思っております。広谷さんにもお会いしておかねばと考えておるところです。今後ともよろしくお願いします。（平成４年卒、下田勝久）

○父、市三郎は数年前に亡くなっております。今まで会報をお送りいただきありがとうございます。長い間ありがとうございました。（昭和１１年高商卒、藤野市三郎氏のご家族）

○残念ながら欠席させていただきます。７月には雪線で諸先輩とお会い出来るのを楽しみにしております。盛会を祈念します。（昭和４１年卒、丸子隆志）

○総会当日は息子の結婚式に重なり本会は欠席します。（昭和４２年卒、山田裕敏）

○昨年８月退職しました。（昭和３３年卒　門田嘉弘）

○健康上の理由で山岳会を脱会致します。（昭和３３年卒　松本康正）

○在学中は大変お世話になりました。東京で頑張ってます。（平成１９年卒　近藤由佳）

○中井博は１月２６日に逝去致しました。亡夫在学中より長年にわたり大変お世話になりましてありがとうございました。皆様のご活躍、会の発展をお祈りいたします。

（昭和３３年卒　中井博氏・夫人（中井淑子））

○２００８・１２・３０～３１と伴、山田、兵頭氏と富士山に登りました。

（平成４年卒　山本新）

○ボランティアをそれなりに忙しくしております。（昭和３２年卒　島田京子）

○しばらく自由に使えるお金がありませんので・・・・すいません。

（平成１９年卒　藤井洋介）

○中高年の登山者は日々進化しています。助っ人として微力ながら貢献します。目指すぞ６０才現役登山家。（昭和５５年卒　西沢裕子）

○目下闘病中。残念ながら欠席させて頂きます。諸兄によろしく。（昭和３０年卒　山本勝）

○だんだん知っている人が少なくなるのでこの際皆様の顔を見に行こうと思います。山は二上山も登らなくなりました。もっぱら俳句の吟行でお寺参りをして居ります。

（昭和３３年卒　東野美智代）

○佐々木さんの話なら聞きに行かなくっちゃ。（昭和４１年卒　大森昌也）

○白馬へスキーにいらっしゃい！（ペンションるんびに一泊で）（昭和４５年卒　大島一恭）

○抜けられない行事と重なりました。申し訳ありません。佐々木先輩の話を聞きたかった。体調は良好です。（昭和４１年卒　藤村達夫）

○今年は欠席です。４／１～５／１に所属の「アルパインクライマーズクラブ岡山」隊（岡山県山岳連盟後援）にてネパールのメラピーク～アンプラプツアラ峠～アイランドピークの２座を登ってきます。また、当会には市大ＯＢ・渡部さんの兄さんの渡部光則さん（信州大ＯＢ）も会員にいます。一緒に岩トレや大山北壁に行ってます。又、当会のホームページがあります（市大とリンクしてます）見てください。来年は県岳連６０周年の年でビックＥＸＰを企画しています。おそらく隊長で参加します（職場の新聞社が後援です）。

（昭和５４年卒　武部秀夫）

○この４月に２９年勤めた天王寺区役所から転勤になりました。あいかわらず山へもなかなか行けない毎日が続いています。（昭和６０年卒　小松稔）

○下手の横好き（スキー）に熱中しています。（昭和３６年卒　小笹孝）

○２００名山挑戦中。（昭和４６年卒　澤井弘忠）

○昨年の総会で賛助会員としてお迎えいただきありがとうございます。２／２４～３／１８上田ご夫妻と３人でニュージーランドを旅いたします。ご好意に感謝致しております。

（賛助会員　鷲田ゆり子）

○お招きありがとうございます。初めての参加で戸惑っておりますが、よろしくお願い申し上げます。（賛助会員　井本陽子）

○就職することになり、大阪を離れることになりましたが、また、よろしくお願いします。

（平成２０年卒　塩見修平）

○豊田市史編さんの関係で愛知県東部の植物調査をしている関係で山野を歩いています。

（昭和５１年卒　渡部教行）

○佐藤君が夢に現れます。（昭和３９年卒　常慶和久）

○現下の困難な時期相変わらず米国で多忙な毎日です。諸兄姉によろしくお伝えの程。

ＴＨＡＮＫ　ＹＯＵ　（昭和２８年卒　内藤毅）

○歳なりに元気で過ごしています。８２才になりました。往事渺茫（おうじびょうぼう）（過ぎ去った昔のことは遠くかすんで明らかでない）であります。（昭和２７年卒　谷口清士）

小林先生の思い出

～「小林治俊先生遺稿集」を読んで

山本　新

思えば不思議なもので、私が山と繋がりを持つようになったのは小林先生との出会いがあったからでした。大阪市立大学の工学部土木工学科に入学して４年生の時に入った研究室が構造工学研究室で、そこで小林先生と出会いました。その当時山岳部は現役の部員が博士課程の下田さんと大学院生の三木さんで幽霊部員が1～2名いる程度で、ほとんど活動していない状態でしたが、体育会への事務的な作業があるので小林先生は私に山岳部のマネージャーをしてくれないかと頼まれ、引き受け、その後尾形さんから堡塁岩に岩登りを誘われて山の世界に引き込まれました。

今回は「小林治俊先生遺稿集を読んで」ということですので大学での研究や教師としての小林先生について私の知っている範囲で書きたいと思います。

私の卒業論文と修士論文は衝撃問題に関するものです。衝撃問題といいましても土木の世界でも知っている人はほとんどいない分野です。物がぶつかった瞬間にぶつかった物体からぶつかられた物体に力が伝達されるのですが、０．１秒よりももっと短い時間では力は波動として伝わります。衝撃問題はその短い時間の内にぶつかられた物体にどのような力が発生するのかを調べる研究です。短い時間と言っても厚みが１０ｃｍといった薄いコンクリートや鋼に発生する衝撃波(3000～5000m/秒)が表面から下面に行って反射して帰ってくる時間、つまり20cm進む時間にぶつかられた物体の中で発生する力を研究するわけです。物体の内部の力を調べようとしてもあまりに短い時間で微細な力を計測する計測器がないため模型を使った実験ができません。そこで小林先生は数学モデルを使って理論的に解析しようとなされました。小林治俊先生遺稿集P129の「衝撃荷重を受ける厚円盤の応力波伝播解析」というのが遠い昔私が携わった研究なんですが、小林治俊先生遺稿集P122の「鋼・コンクリート合成円盤の弾性衝撃応答解析」も同じ理論で書かれています。前半のややこしい微分方程式をラプラス変換や虚数を使って解いてそれをコンピューターで計算し、グラフを描きます。そんな数学を用いた研究方法を、日本の中では恐らく始めて小林先生は編み出しました。工学で使うための近似解を求めるというよりは、あくまでも厳密に物事の真理を追究する理学部に近い研究のように思いました。土木という分野の中ではかなり珍しい、

数式だらけの論文です。今回他の人の原稿を読んで小林先生の数学への熱い思いが随分と前からあった事を知らされました。

研究室での小林先生はどっちかというとあまりしゃべらない方で、研究室や廊下で生徒が騒いでいた時に「ここは喫茶店とちがうんやぞ」と激怒した事があって、それからはみんな小林先生の前ではちょっと緊張しているような感じでした。しかし、いったんお酒を飲むとすこぶる饒舌になられて、研究以外の事で随分と白熱した議論をしました。

授業や研究での指導は厳しかったですが、その半面、留年しそうな生徒や困っている生徒には親身になって相談にのっておられました。就職先が決まったが卒業に単位が足りない生徒がいて、追試を２回しても点が取れず単位を落としそうになった時は夜遅くまで付きっ切りで教えておられました。

他の先生の書かれた原稿を読んで小林先生が多くの方に慕われていた事を痛感しました。亡くなられてからこれだけの原稿を集めて遺稿集を製本するという事はなかなかない事です。自分が死んだ後には自分のやった研究論文を残すという各先生の研究に対する思いを感じました。私もその活動にほんの微力ながら関われた事を誇りに思います。

「小林治俊先生遺稿集」に寄稿している方々はほとんど私が知っている方々ばかりで大変懐かしく思うとともに、小林先生の最期が近づいた頃の記述には最後まで自分の研究や大学の体制、研究室のあり方を慮った箇所があり、大学の廊下を足早に歩き回りみんなを取りまとめようとする小林先生の姿が目に浮かぶようでした。
やっと教授になった矢先の58歳の早すぎる最後は無念だったのではないかと思います。

＜編注＞

—「小林治俊先生遺稿集」は小林治俊先生遺稿集編集委員会（委員長　東田　淳氏）の編集で今から３年前の平成１８年３月２０日に発行されたものです

—今回「遺稿集（写し）」を製本化し、ヒュッテ雪線に保管します。ご一読下さい。

続・駆り立てられるもの

和田城志

テレビで、平山郁夫の画業についての特集番組があった。横山操、加山又造と並ぶ戦後を代表する日本画家である。シルクロード、仏典の道を描いて有名で、彼の大作、薬師寺の壁画には圧倒された。シルクロードでのスケッチ旅行は五十回を超えるという。また、別の番組で、現代の洛中洛外図を製作しているのも見た。被爆体験の禁を乗り超えて、原爆の図を描いたことも知った。彼は生きているうちに、地位も名誉も尊敬も勝ち得た芸術家だ。彼を画業に駆り立てるものは、いったい何であろうか。

去年は比較的よく美術館に通った。高知県立美術館にはたびたび訪れた。ここにはシャガールの常設展示があり何度か見たが、見るたびに分からなくなる。色彩の衝撃が徐々にモチーフの暗さに取り込まれて、考え込んでしまう。メルヘンがメルヘンでなくなって、そのうち見るのがつらくなる。なのに、記憶に鮮明に残る。

特別展示室で、中島潔の原画展が催されたことがあり、昔からファンだったので見に行った。「みすず憧憬」と銘打って、金子みすずの詩を絵にしたものがいくつかあった。まったく西欧絵画と正反対の絵で、分かりやすく情緒的で、妖しいエロチシズムの漂う童画だ。私の好みにぴったりだ。色彩もシャガールに負けていないし、メルヘンも社会性をにじませていて悪くはない。なのに、ちょっと飽きてくる。下手くそなシャガールは描き足らず、上手な中島は描き過ぎているのかな。彼らを絵に駆り立てるものは、明確に生い立ちにうかがわれる。どちらの絵にも哀愁が漂い、長く余韻に浸れる。

兵庫県立美術館にフェルメールが来るというから見に行った。彼の絵は一枚だけだったが、オランダ絵画の潮流を俯瞰できて良かった。人物画を描くなら、フェルメールだと思った。レンブラントのような強烈な陰影は人間性をデホルメしすぎるように感じる。フェルメールのにじみでるようなやわらかな光のタッチは素直だし、モチーフのせいだろうか、表現があからさまではないように思う。例えれば、前者が松本清張で後者が藤沢周平かな。

静かな美術館の南側はウオーターフロントに面していて、夕日がきれいだった。美術館はデートに最適の場所だ。モチーフに引き込まれるのはもちろんだが、絵を描く人々の日常はどんなんだろうと夢想していると、言葉が不要だし、それでいて共通の時間が深まっていくように思う。駆り立てられるものは彼らの中に明確にあるのに、いつも靄がかかったようにつかめないでいる。天才たちはもがき、何かを追い求め、そして、その痕跡が絵に残されていく。

天才といえば、レオナルド・ダ・ヴィンチは完成作の少ない画家と言われている。「モナ・リザ」だけは身近に置いて、数年をかけて絵筆を重ねたというから、よっぽど気に入っていたのだろう。最近モデルの正体が分かったと報道された。「リザ・デル・ジョコンド」、フィレンチェの豪商のお内儀さんらしいけど、片思いでもしていたのかな。登山が一つの頂上で終わらないように、結果より過程が重視されるように、画家はモチーフに迫る過程のなかに生きている。だから、常に未完なのだ。死ぬまで描き続けられる所以だ。

西欧登山史の本では、ダ・ヴィンチは近代登山の先駆けとして語られる。軍事、学術、経済の理由ではなく、純粋に登ること自体が目的である登山、それを最初に始めた男と言われている。未知を求める好奇心、宗教的表現に科学的探究心、自然のあらゆるものが彼を駆り立てる。

平山の洛中洛外図に感動していたら、その絵の大元である狩野永徳の洛中洛外図（国宝）が展示されるという。現存する狩野永徳の作品すべてが京都国立博物館で公開されるとのニュースを聞いた。海外流出したものも含め、すべてが一堂に会するという。最初で最後、これを見逃すわけには行かない。数年前雪舟展があったとき、先に見た妻がその人の多さにうんざりして後悔していたので、私は見に行くのを止めたことがあったが、今回はそうはいっておられない。しかし、予想通り最低の見物になった。二時間半列に並ばされ、博物館の中にやっと入ったと思ったら、絵に近づくのに一苦労、じっと立ち止まって観ることもできない。わずか３０分ほどで人の流れに押し出された。

絵には文句はない。素晴らしい迫力だった。２４歳で描いたと言う洛中洛外図、天才だ。日本にもルネッサンスと同じ時代を生きた天才がいたんだ。巨大な屏風絵、襖絵、天井画は、イタリアルネッサンスのフレスコ画と同じだ。残念だが、彼の絵の多くは建物の消失とともに失われた。安土城や聚楽第が壊されず、また、日本にカンバス油彩画のような技法が発明されていたら、多くの名画が残されていただろう。日本画と言えば、掛け軸や浮世絵の類を思い出すが、戦国時代は実に勇壮な絵を描いていた。とにかく大きい。襖絵は障壁画だ。ゆったりとした空間で、こころゆくまで眺めていたいと思った。

その思いは別の場所で満たされた。機会があって琴平の金刀比羅宮を訪れ、初めて一般公開されるという表書院、裏書院を拝見した。紅葉真っ盛り、平日の金刀比羅宮は人影もまばらで、長い階段もそぞろ歩きの風情、鄙びた観光地の寂しささえ漂っていた。期間限定、観られるチャンスはそうはない。期待は裏切られないどころか、今まで見た絵画空間の中で一番だった。ここは美術館ではない、かつて使われていた貴賓接待の書院である。飾られた絵画ではなく、絵画が空間を飾っている。サンタ・マリア・デル・グラツィエ修道院で、実物の「最後の晩餐」を見るのと同じだ。

丸山応挙、伊藤若冲、岸岱、目を奪われた。まばらな訪問者、静かな座敷に座って、周囲の襖絵、障壁画を眺めた。若冲の「花丸図」がすごい。ここ讃岐出身の平賀源内が活躍した江戸時代は博物学の時代でもあるが、和漢三才図会のような図鑑絵を部屋の装飾に使うとは、筆致の緻密さは言うに及ばず、そのデザイン性は超モダン、その迫力に度肝を抜かれた。たまたま出くわしたＮＨＫの日曜美術館の撮影スタッフも親切で、その録画風景も楽しめた。次の日に、壇ふみやゲストの池内紀が来て、本番を収録する予定だと言っていた。僕らは撮影の邪魔をしないかと気にしていたのに、彼らは僕らの鑑賞を妨げていないか気遣った。優れたスタッフだと感じた。

また、新書院に田窪恭治が壁画を製作中である。モチーフはこの神社のある象頭山の藪椿の群生。「金刀比羅平宮、書院の美」と言う本に、池内紀が田窪を紹介した小文があって、ルネッサンス的芸術家の面目躍如たるところを紹介している。彼が１０年をかけて修復再生したノルマンディーの「サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂」は本当に素晴らしい。建築家、彫刻家、画家をひとりでこなすその力量は脱帽だ。椿書院の完成が楽しみだ。

池内紀はドイツ文学者で、登山にも造詣が深く、山岳雑誌にエッセイをよく書いている。何だか親近感があって、彼の新訳であるゲーテの「ファウスト」を読んだことがある。「ファウスト」と言えば、いつも途中で投げ出していたが、やっと初めて最後まで読むことができた。森鴎外が訳して以来多くの訳本があり、手元に相良守峯訳と高橋義孝訳の文庫本

を持っているが、何だか小難しかった。池内訳も十分難しいけれど、それはゲーテのせいで、彼のせいではない。解説に、ゲーテは旅好きで、山好き、温泉好き、女好きであった、と書いてあった。天才と比べては恐れ多いが、何だか身に詰まされる気になる。ちなみに、この本の装丁、挿絵は銅板画家の山本容子が描いていて、これがシャガールそっくりの下手うまメルヘンタッチ、メフィストフェレスのアイロニカルな機知やシニカルな箴言にぴったりで素敵だった。

池内さんが絵画にも造詣が深いとなると、ますます興味が湧いてくる。ゲーテの短詩を引用している。「何がいちばんしたいか」「自分の影を跳びこしたい」画家や詩人、芸術家は皆、他人が目標ではないのだな。カフカの研究者である池内さんは、老境に入ってやっと「ファウスト」を完訳した。その感慨を彼は「影を跳び越えた」気がすると表現している。さわやかな羨ましい言葉だ。私には創作も翻訳も出来ないが、古典中の古典、「ファウスト」をこの歳になって読めたことが嬉しい。もう一度、ゆっくりと丁寧に詩人の世界に浸りたい。

坂東玉三郎のテレビ番組を見た。その立ち振る舞い、受け答えの誠実さ、ちょっと魅せられた。彼自身が一服の絵画ではあるが、化粧を落として稽古する表情のほうがもっといい。彼の言葉、「遠くを見ない、明日だけを見る」には感動した。プロフェッショナルな言葉だなあ。「駆り立てられるものなどない。ただ、いい音楽を聴くと、いい舞を考えてしまう。向上したい、ちゃんとしたい、何かのためにやるというのではなく、ただ真面目にやる、生真面目にやる、それだけです」梨園生まれではない病弱な少年が踊りに目覚め、名跡坂東家に養子縁組し、歌舞伎の世界にいざなわれる。芸歴五十年、歌舞伎役者というだけでなく、振り付け、演出、ボーダーレスの演劇空間に生きる平成の名優、彼はきっと人生そのものに駆り立てられている。

登山家にもそういう人がいる。山野井泰史と長尾妙子だ。一月にＮＨＫで放映されたからご存知の方も多いだろう。彼らの登山歴からして個性的だ。山野井は純粋なソロロッククライマーだ。パタゴニアから北極圏、八千メートル峰のバリーエーション、ヨセミテのフリークライミング、何でもどこでもこなす。高さや未踏峰にまったくこだわらない。長尾はオーソドックスにアルパインクライマーで、アルプス三大北壁からヒマラヤアルパインスタイルへ時代の流れに沿って登ってきた女流登山家の第一人者だ。二人は日本の登山史上最強のペアクライマーだろう。９歳年上の姉さん女房というのがまたいい。世界をリードする初めての日本人登山家と言っていい。

長尾に初めて会ったのは、８６年パキスタンだった。ナンガ・パルバットに行ったときだった。やわらかな表情、朴訥とした話しぶり、何処にあんな闘志を秘めているのか。素敵な女性だと思った。チョー・オユーのアルパインスタイル登頂やマカルー登頂時の遭難劇は壮絶だった。登頂後、頂上直下８３００ｍ付近でビバークを余儀なくされ、パートナーは死亡、彼女はかろうじて生還したが、両手両足の指のほとんどを失った。

山野井に会ったのは９１年、あの時もナンガ・パルバットの登山のときだった。飛行機で同席し、色々と話をした。狂気じみた表情はなく、生真面目な好青年だった。トロール、フィッツロイ、バフィン、世界の名だたる巨大岩壁を単独登攀している。Ｋ２を含め、高峰の単独行も多い。オールマイティーな登山家である。

この二人が最高のパホーマンスをしたのが、ギャチュンカンである。これは極限の登攀の一つである。奇跡の生還をした山野井は、英国で０４年度の世界で最も優れた登山家に選ばれた。彼はこの登攀で、凍傷によってすべての足の指と手の指４本を失った。この登山の顛末は、沢木耕太郎によって優れたドキュメンタリー『凍』にまとめられている。

常識的に考えて、遭難後の彼らの体力技術は、以前と比べてはるかに落ちているだろう。しかし、その後も二人は登山を諦めない。過去を振り返らず、前だけを見る。登攀意欲をそそり、自分を駆り立てる山や岩壁にだけに関心がある。将来設計や生活の見通しもあるようには見えない。ただ明日のクライミングにだけに意識を集中している。

ＮＨＫで放映されたドキュメンタリーはグリーンランドの未踏の岩壁を登るものだったが、その中で、山野井は明言している。「過去の登攀などどうでもいい、今、目の前の課題をどう克服するか。考えているのは明日のクライミングのことだけ、無事頂上に立てるか否か、それだけだ」玉三郎とまったく同じ言葉である。

すべての天才たちは何か駆り立てられるものを持っている。しかし、それは言葉で表現された途端、嘘っぽくなる。本物は説明や分析を受け付けないのだ。現実的で具体的で概念化できないもの、子供の憧れと同じ単純で果てしない夢の連鎖なのだ。彼らの言う明日とは、時間的にも空間的にも身近な明日のことだが、考えないと言う未来にも延長できる。未来は間違いなく一日一日の蓄積の延長にある。だからこそ、彼らは未来を語らず今日を実践するのだ。そのことが確実に未来を作り上げて行く。

ゲーテは言った「世の中は、したいけどできないことと、できるけどしたくないことで成り立っている」こうも言う「したいことを持っていると思い込んでいるときほど、したいことから遠ざかっていることはない」確かに大半の我ら凡人はそうだ。しかし、常に例外がいる。ここに書いた人々はしたいことをしようと試み、かつしてきた人々である。それの一途さが夢を実現させる。彼らは、完成のロードマップなど気にしていないように見える。出来ることをし、最善を尽くすことだけに集中している。

そこに私は、駆り立てられるものを仮託する。我々は常に歴史の驚異を理解しかねてきた。ああ、記述される歴史は常に非日常だ、異常な出来事ばかりの連続だ。ありふれた日常の幸福と安寧を願う人々には理解しがたい世界だ。しかし、人は皆無意識のうちに、つまり潜在的好奇心というものを持っている。歴史的偉業はその琴線に触れるのだろう。凡人の皮膜を少し破けば、誰だって天才の入り口に立てるのだ。

この小文をゲーテの至言で締め括ろう。

「一つのことを正しく知り、且つ実行することは、百通りのことを半ばするより、高い教養を与えるものである」

「考える人間のもっとも美しい幸福は、究めえるものを究めてしまい、究めえないものを静かに崇めることである」

残念ながら、私は一つのことに熱中してきたが、正しく知るにいたらなかった。山は静かに崇める対象であったのかも知れない。

皆様からのご寄稿をお待ちしています

会報担当

1．前年度の活動について

（1）会報の発行

４６号：２００８年　６月１８日発行

４７号：２００８年１２月２５日発行

＜注＞特記事項：特別号を発行する（２００９年　３月　３日発行）

（2）「森本レター・ファイル」（編纂：故・清原鉄也氏）および「森本書簡」（原本）の製本（保管先：ヒュッテ雪線）

（3）「三島書簡」（原本）の製本（保管先：ヒュッテ雪線）

2.今年度の進め方

より多くの会員・賛助会員に参加してもらえるように、記事内容を以下の通り領域別に明確化し、それにより今以上の寄稿を促進したいと思っています。
ぜひ皆様からのご寄稿をお待ちしています。

＜領域区分＞

（1）　最近の山行：対象の山は「ヒマラヤから裏山まで」可

（2）　過去の山行：今なお印象深い山行を「回想の山行」と題し、寄稿願う。

（3）　登山（探検含む）に関する随想や紀行文

（4）　登山論

（5）　山の本紹介または書評

（6）　山のスケッチ、写真（簡単なコメント入り）

＜参考＞その他、会報担当の方では次の項目を随時実施します。

①近況紹介：総会出欠の返送はがき・記載欄より転記する。

②近況雑記：①の発展版（例：「山里暮らし」等）

＜編集後記＞

・４月にＮＨＫ・ＴＶの「ＨＶ特集」や「ワンダー×ワンダー」で「驚異の結晶洞窟」と題して、ナイカ鉱山（メキシコ北部。チワワ砂漠）で２０００年に（再）発見された洞窟探検の紹介がありました。この洞窟は地底３００ｍのマグマの上に位置し、気温４５℃&湿度１００％という厳しいコンディションのため、わずか１０分ほどで熱中症になってしまうという。探検実施に向けて１年間の周到な準備（体を冷やす特殊な防護服等着用）をし、６０分を限度として洞窟探検家２名（イタリア人）による地図作りから始めています。そして、２００６年には世界中の学者・研究者が集まり、本格的に科学調査が進行中です。洞窟内部は、長さ１０ｍを超える世界最大級の巨大で透明な結晶柱が１００本以上林立し、更に奥には結晶で囲まれた“迷宮”が広がっており、まさに「地底旅行」（ジュール・ヴェルヌ著）の世界だったわけです。
この結晶の正体は地下水に溶けていた石膏が長年月を経て結晶となったようで、８万年前に地震で巨大結晶（最も古いのは５０万年前）が折れたことも判明しているとのこと。

・１６年前に初体験した「河内風穴」（滋賀県多賀町）、今年２月に訪れた沖縄の玉泉洞（３０万年前に遡る東洋一の洞窟）を回想しながら久し振りにワクワクして映像に見入りました。本当に楽しく充実したひとときでした。

・そうして、「硫黄尾根」に最初に行った時の『次は何に出くわすか』という期待と不安が混じりあった気持ちを思い出しました。（奥田　記）